

「自治体国際協力専門家派遣事業」について

北京事務所

自治体国際化協会では、中国の地方政府から要望のあった国際協力案件に的確に応え、技術指導や人材の育成等を行う「自治体国際協力専門家派遣事業」を 1998 年度から実施しています。この事業では、農業、林業、環境保全、土木、都市計画、医療、教育等の 32 分野からなる国際協力人材バンク（2011 年度 4 月現在の登録者数 1,382 名）に登録された日本の地方自治体職員（退職者を含む）を概ね 1 週間から 2 週間、要望のあった地方政府に派遣しています。

今年度までに、延べ 80 名の専門家を中国の各地方政府に派遣し、その指導内容は派遣受入機関から好評を得るとともに、指導する専門家にとっても貴重な体験となっています。また、これを契機とした日中地域間の交流の促進という成果もあげています。

■ 2011 年度実績

北京事務所において実施しました 6 件の派遣実績を紹介させていただきます（出発日時順、期間は国際往復時間を含む）。

派遣先	期間	分野	専門家
内モンゴル自治区モリンドウ・ダウール	9.13-18	農業：水稻の標準化栽培	香川県 OB
山東省徳州市	9.16-26	畜産：乳牛防疫・治療等	新潟県 OB
内モンゴル自治区赤峰市	9.18-24	農業：植物の病虫害駆除	香川県 OB
内モンゴル自治区通遼市	9.19-25	牧畜：肉牛飼育	北九州市職員
遼寧省鞍山市	10.8-14	環境：廃棄物処理場の浸出水処理	静岡市 OB
遼寧省	10.16-22	環境：汚水処理技術	福岡県職員

■ 派遣案件 1

派遣先：内モンゴル自治区モリンドウ・ダウール

期 間：9.13-18

分 野：【農業】有機栽培と水稻の標準化栽培

専門家：香川県 OB 佐々木省三氏

アテンド：金主任調査員

概 要：



佐々木専門家による講義風景

内蒙古自治区莫力達瓦旗の農業・牧畜業全般を所管する莫力達瓦旗（県に相当）農牧局の要望に応じて、専門家は日本における有機水稻栽培の技術を紹介し、水

稲のマーケティング戦略について講義されました。

まず、有機水稻栽培には、人と自然がともに生きる哲学が根本にあり、中国でもヘルシー志向が強まる中、有機栽培農法や減農薬栽培は農業の未来であると説明されました。

続いて日本の農業技術普及セクションで農家指導用に作成された有機水稻栽培作業要領を用いて、栽培技術のポイントを具体的に説明されました。

最後は、一般栽培においても有機栽培の手法を活用すると、健全な農産物の持続可能な生産につながり、農家、地域がともに潤う道であると、有機栽培手法の活用を薦めて締めくくられました。

また、水稻のマーケティング戦略についての講義では、有機栽培、減農薬栽培を行う産地イメージをブランド化し、安全・安心を根気よく発信し続けること、栽培・生産工程の透明性を高めた細かい記録を取り続け、商品に付して消費者に安心を PR したり、インターネットで公開したりする販売戦略が必要であることを、具体的手法も提案しながら、強調されました。

翌日の意見交換会では、「有機栽培は増収による増益を目指さない。ブランド戦略の樹立による値上げ、直売などにより消費者がコストを負担することで成立させていく。有機栽培（減農薬）の発想は、地域が持続可能な発展により末永く栄えていく道で、農業の将来である」との説明を聞きながら、農牧局副局長などが深く頷き、謝意を述べました。

最後に、水稻栽培技術の標準化について、少人数指導員が広範な地域での農家指導を余儀なくされている実情から、水稻栽培要領をマニュアル化し、郷・鎮の技術普及員の水準を引き上げ、標準化栽培を目指してほしいとアドバイスされました。

■ 派遣案件 2

派遣先: 山東省徳州市

期 間: 9.13-26

分 野: 【畜産】乳牛防疫・治療等

専門家: 新潟県 OB 今井明夫氏

アテンド: 広瀬所長補佐

概 要:

徳州市は農業、牧畜等が盛んな場所です。近年、乳牛の乳腺炎が多発し、解決策が見つからず、牛乳の質と産量の両方に大きな影響が出ていることから専門家派遣要望を受け、新潟県職員 OB の方に指導にあたってくださいました。

専門家は現地に到着すると、牛の飼料を丹念にチェックし始めました。飼料を手でつまみ、現場に居合わせた職員に「牛に与える餌を自ら食べられるか？」と問うと、口に入れて咀嚼し始め、飼料をゆっくり飲み込んだ後、「自ら食べられない餌を牛に与えては絶対いけない。」と指摘されました。飼料を咀嚼することで、飼料の配合バランス等を確認されたようです。結果、それらのバランスは良好であり、微量元素の均衡も標準を満たしていることから、飼料は乳腺炎の誘因ではないと判断されました。



飼料を咀嚼する今井専門家

次に、搾乳方法に問題があるか否か従業員による搾乳作業の全過程を視察し、専門家は問題点を発見されました。

- ・搾乳装置の圧力値が、標準値より低く設定されている。
- ・牛乳が出なくなったら、すぐに搾乳機を乳頭から外す。

この2点を改善すれば、乳牛の乳腺炎の発病率は下がる、と専門家は指摘されました。

飼料や搾乳状況の視察を終えた後、現場の職員とディスカッションを行い、直接問題点等を指摘し、解決策をアドバイスされました。専門家の真剣な指導に対し、現地職員は皆真剣な眼差しで意見に耳を傾けていました。

■ 派遣案件 3

派遣先: 内モンゴル自治区赤峰市

期 間: 9.18~24

分 野:【農業】ハウス栽培野菜の病害虫対策

専門家: 香川県 OB 佐々木省三氏

アテンド: 金丹実主任調査員

概 要:



佐々木専門家によるアドバイス

赤峰市農牧科学研究院植物保護研究所の招聘に応じ、現場指導と講義により、ハウス栽培に多発する病害虫対策について指導されました。

まず現場指導ですが、トマト潰瘍、立ち枯れが課題のトマト農家では、「病原菌はコナジラミ。犯された株を即取り除く。元肥のやり過ぎや微量元素の過多施用が病害の原因。株間間隔が狭く風通しが悪い。立ち枯れ病は、土壌の徹底消毒により予防すべき。トマトが結果した後、病気が移らないように下の葉をすべて取り除く。植物ホルモンの濃度が高すぎる、授粉補助剤の成分や濃度を確認する

ように」などの指導を行いました。

ピーマンの栽培農家では、根瘤線虫によってハウス内作物の3割から5割が被害を受けた状態でした。「連作や化学肥料使用過多が原因。媒介するシルバーリーフコナジラミの防除は農薬では難しい。害虫の生態を理解し、栽培方法の改善や、土壌管理の適正化により防除するしかない」と指導され、とくに太陽熱による土壌消毒の徹底を薦められました。

研究者向け講義では、①日本の先進的な施設栽培技術、②病虫害防除と予防の方法、③生物農薬等について映像や資料を用いて詳しく説明されました。

特に病虫害対策については、適正な栽培管理による病虫害の発生回避が上策であり、問題点の改善が急務と説かれ、温湯による種子消毒、太陽熱を利用した土壌消毒など、有機農業の技術による病虫害の予防と防除について説明されました。また、生物農薬の種類、日本における利用の現状、天敵、有用微生物等について説明されました。



研究者向け講義の様子

農家への指導については、研究者と市普及機関指導員との連携協力により行うことが望ましいとの専門家の事前アドバイスを受け、今回の講義には市農業科技普及センター関係者も参加しました。専門家が、農業全般の根幹にかかわる有機栽培の哲学について、機会を捉えて“伝道”される姿はとても印象的でした。

■ 派遣案件 4

派遣先: 内モンゴル自治区通遼市

期 間: 9.19-25

分 野: 【牧畜】肉牛飼育

専門家: 北九州市職員 藤田景清氏

アテンド: 古川所長補佐

概 要:

通遼市牧畜獣医科学研究所では、牧畜、獣医、草原の分野で直面している課題の研究に取り組むとともに、新技術の導入、普及、人材トレーニングなどが行われています。専門家は、まず肉牛にかかる市場管理・肥育・肉牛屠畜加工等が行われている施設や人工授精ステーション、育成牧場等を見てまわり、通遼市の牧畜・肉牛飼育の現状を視察しました。

そして、現地の牧畜の現状を確認した上で、通遼市の牧畜関連各部門の専門



現地施設内で指導する藤田専門家

家・指導者の方々が一堂に会した会議室にて「肉牛の肥育技術」「発酵食品を使ったプロバイオテクスの活用方法」等について日本での事例を示しながら講義を行われました。

肥育を決める要因には固体要因、環境要因、飼料要因があります。専門家はそれぞれについて、日本で現在行っている最新技術を映像で示しながらレクチャーをされました。また、日本の黒毛和牛や交雑種の知識のほか、日本で行われている去勢牛を育てる技術、牛の肥育や肉の品質向上のために取り組んでいる飼料開発や脂肪交雑に密接に関わっている栄養についての知識などを伝授しました。今回の指導を機に通遼における肉牛肥育や肉牛品質改善技術の更なる向上が期待されます。



放牧場での指導風景

■ 派遣案件 5

派遣先: 遼寧省鞍山市

期 間: 10.8-10.14

分 野:【環境】廃棄物処理場の浸出水処理

専門家: 静岡市 OB 瀬本 豊久 氏

アテンド: 林所長補佐

概 要:

瀬本専門家は過去ゴミ焼却施設の建設責任者を務められた他、現在も廃棄物処理に関する専門家として世界各地で活躍されています。専門家が訪問した遼寧省鞍山市廃棄物処理センターでは、露天の最終処分場から流出する浸出水処理が喫緊の課題となっていました。ここで専門家は廃棄物処理センター（最終処理施設、汚水処理施設、メタンガス処理施設等）を視察し現状の把握をされた後、センター職員との間での意見交換及びアドバイスを行われました。

アドバイスは、①最終処分場での雨水対策及び覆土の実施 ②汚水処理施設内の水質管理時に注視すべき数値（COD・BOD 値、PH 値等）③停止しているタンクの改造による曝気行程の改善 といった、短期的に実施可能な手法及び、長期的抜本的な問題解決方法としての焼却炉設置の提案など、具体的な問題解決に向けた技術の提案が行われました。

その他、日をあらためて瀋陽科学技術大学においてごみ処理技術に関する日本国内や世界各国の先進事例の紹介を中心とした講義を行われました。スーツケースいっぱいにつまったレジュメや各種データ、サンプルは専門家の強い熱

意を感じるものでした。



最終処理場の視察状況



汚水処理施設で説明を行う瀬本専門家

■ 派遣案件 6

派遣先: 遼寧省

期 間: 10.16-22

分 野:【環境】汚水処理技術

専門家: 福岡県職員 田尻英樹氏

アテンド: 広瀬所長補佐

概 要:

遼寧省では「第 12 次五ヵ年計画」において、村、鎮（町）レベルの汚水処理施設を日本の農業集落排水施設を参考に施設設計し 1,000 箇所程度建設予定であり、経済的かつ効率的な建設方法の指導を仰ぎたいとの要望に対し、福岡県職員の方が指導にあたられました。

既に完成済の施設を視察され、現状の運転状況を確認されるとともに、建設予定地へ出向き、周辺状況を確認されました。遼寧省においては 5,000 トンの汚水処理の計画予定があり、汚水処理施設の施設施工は遼寧省が行い、下水管敷設は地方が行うこととなっていますが、現地を視察された専門家は、下水管敷設が全て完了するまでには一定の歳月を要する可能性がある中で、段階を追った設備建設設計を行うことにより、下水処理能力を段階的に高めるプランなど経済的な建設方法を助言されました。

現場確認の後、建設予定の設計図を基に現地職員とディスカッションを行い、様々な問題点等を指摘。また、日本での最新技術を紹介するなど効率の良い設計をアドバイスされました。



処理施設を視察する専門家

北京事務所では、2012 年度も引き続き専門家派遣事業を実施する予定で、今年 3 月を目途に中国の地方政府に対して派遣要望の聴取を行い、日本国内の自治体の専門家とのマッチングを進めていく予定をしております。日本の自治体ならびに中国の地方政府におかれましては、引き続き日中地方政府間の国際協力活動の推進にご協力をよろしくお願いいたします。

(古川所長補佐 京都府派遣)

